

三井文庫

公益財団法人 三井文庫の取り組み

三井文庫は、社会経済史史料の保存・公開、調査研究を行う史料館（三井文庫本館）と、美術品の保存・公開、調査研究を行う三井記念美術館からなる非営利の研究機関（公益財団法人）です。

史料館の起源は、20世紀初頭にさかのぼることができます。第二次世界大戦後、GHQの指令により三井本社は解散し、三井文庫も活動の停止を余儀なくされましたが、その後、三井文庫を再建しようという話が三井グループの中で持ち上がり、文部省からの認可を受けて、1965（昭和40）年5月に現在地、中野区上高田5丁目において財団法人三井文庫が設立されました。本事業の再開により、これまで門外不出であった三井家文書が、公開されることとなり、学界の研究に供されることになりました。

三井文庫においては近世の商業金融と近代の企業経営に関する研究も行い、その成果を『三井文庫論叢』（年1回刊行）に発表するかたわら、『三井事業史』（本編3巻5冊、史料編4巻5冊）の刊行を進めました（2001年3月に全巻完結）。また、2022（令和4）年10月からウェブ上で「三井文庫所蔵史料データベース」を公開開始しました。同年12月現在、92,000点余の史料情報を検索、閲覧に供しています。



旧三井文庫外観（三井文庫所蔵）



現三井文庫外観

また1985（昭和60）年には文化史研究部門（別館）を併設し、数次にわたり三井家伝来の美術品・郵便切手等の寄贈を受け、また、その他の法人・個人からの寄付を受けて、研究・公開を行ってきました。2005（平成17）年10月には、所蔵する美術品を公開するために三井家および三井グループに縁の深い日本橋に移転して、三井記念美術館を開設致しました。

三井家は三井高利の子どもたちの時代に、長男高平が惣領家北家、三男高治が新町家、四男高伴が室町家、九男高久が南家など9家とされました（のち2家追加され、三井11家となります）。経営面でさまざまな浮沈もありましたが、各三井家がそれぞれ美術品を収集、特に享保から元文年間の営業収益が伸びた時期は、茶道具を主とする名物道具の収集が盛んでした。三井記念美術館は、北家、新町家、室町家、南家、伊皿子家、本村町家のほか、三井家の親戚である鷹司家からの寄贈を受けた美術品約4,000点を所蔵しています。国宝・重要文化財をはじめとする三井各家から寄贈された名宝の数々を展示・公開し、文化財の保存とともに研究活動や芸術文化の発信に努めています。



三井記念美術館